後世の人々に託す ―浜口梧陵―

「バタバタ、ドーン、バリバリバリ……。」
梧陵が三十五歳の時であった。嘉永七年（一八五四年）十一月四日（現在の暦では十二月二十三日頃）の朝八時頃、広村（現在の広川町）に帰っていた梧陵を大きな地震が襲った。
「この大きな揺れは、もしや……。」
大きな地震の後、津波が襲うことを知っていた梧陵は、大急ぎで家族と村人を高台にある神社に避難させたが、津波は来なかった。
「バタバタバタ、ズドドーン、バリバリバリ……。」
翌日、午後四時頃、前日より大きな地震が発生した。急いで梧陵は海岸に向かった。海の様子がおかしいことに気付いた梧陵は、逃げ遅れた人を助けるために、数名の若者たちと村を見回っていた。
「ズザザザザー、ドーン、ドーン、ドーン……。」
その時、雷のような音を響かせながら、津波が広村に何度も押し寄せた。

広村を襲う津波

「しまった。」
梧陵は、津波にのみこまれた。命からがら岸にたどりつくことができた梧陵は、自分に言い聞かせた。
「なにくそ、今、自分がくじけてはいけない。こうしている間も村人は、命の危険にさらされている。」
梧陵は、懸命に救助活動を行った。
「夜になると、村人は避難する場所がわからなくなるだろう。村人を安全な場所に誘導するには……、そうだ、稲[※1]むらに火をつけて知らせよう。」
梧陵はためらわず道ばたに積みあげられていた稲むらに火をつけ、避難してくる村人を安全な場所に誘導した。この行動は見事に成功し、漂流している人々の中には、この火を頼りに助かった人も少なからずいた。

津波がおさまった後も、梧陵は、隣村の庄屋に頼んで避難した村人が食べる米を手に入れたり、寒さや雨露をしのぐために必要な小屋を建てたりして、余震の恐怖におびえる村人を支え励ました。梧陵は、津波で荒れ地のようになった村、作物を植えつけられなくなった田畑、壊された漁船を見るたびに、心が痛んだ。
「このままでは、だめだ。」
紀州藩に援助を求める手紙を書いたが、食べ物の不足や津波の恐怖から、多くの村人が広村をはなれていった。
「よし……。」
梧陵は大きくうなずいて、村役人を集めるよう指示を出した。村役人を集めた会議で、復旧作業をするために必要な人員や炊き出しの手配をしたり、家々から流れ出した米俵や品物を拾い集め、元の持ち主に戻るように確認作業を行ったりするように伝えた。
（米も必要だな。私がもっている玄米二百俵を寄付しよう。）

このことを発表したことがきっかけとなり、広村の中からも、隣の湯浅村（現在の湯浅町）からも米やお金の寄付が寄せられるようになった。また、梧陵は、家や家財道具、それに農具等を失って途方に暮れる村人のために、農具や漁船を買い与えたり、家の修復費を援助したりした。

しかし、村人の多くは、

「また津波が襲ってくるのではないか。昔から繰り返し襲ってきたしな……。」

と、不安を感じていた。村人の様子を見て、梧陵は、別の不安を感じていた。

「まだまだだめだ。村の人たちを助けようとしてきたが、それだけでは人々の生活を守ることになっていない。生活と将来の安全を、広村の村人自身の手で守っていくことが必要だ。」

そんな時、一つの思いが頭をよぎった。

「村人自身の手で堤防をつくろう。そのお金は、自分が出そう。」

梧陵は、堤防築造を紀州藩に願い出た。計画では、広村のまわりを堤防で取り囲むという大がかりなものであった。村人は、

「どうして堤防などつくるのか。」

と考え、梧陵の計画をなかなか受け入れなかった。梧陵は、粘り強く村人に説明した。その結果、子どもから大人まで、ほとんどの村人が工事に参加することになった。

広村での堤防工事を開始して十か月後、今度は江戸を大地震が襲った。その時に発生した火災で、江戸の町では多くの人々が亡くなり、江戸で営業していた梧陵の店も壊滅的な被害を受けた。このため、堤防工事の資金を提供してきた家業の醤油づくりも経営が苦しくなった。

「家業をたてなおさなければ。」

銚子[※2]に戻った梧陵に、

「このまま広村の堤防の建設にお金を出し続けては、店がつぶれてしまいます。どうかお止めください。」

と、番頭が懇願した。

（確かにこのまま堤防の工事を続ければ、家業をつぶしてしまう。しかし、今、堤防の工事を止めるわけにはいかない。広村のためにも家業の経営に専念し、工事も続けよう。）

梧陵の心を知る店の人たちは、一丸となって働き、家業の経営も順調に回復していった。

広村堤防の工事が始まって二年後、ふるさと広村に戻った梧陵は、人々が繰り返し堤防の土を盛り、固めていく姿を見ながら、何度も静かに、そして深くうなずいた。

そして、約四年にわたる大工事を終えて、堤防はついに完成した。全長は当初の設計よりは短くなったが、正面から襲ってくる津波には十分耐えられるものであると梧陵は思った。

「これで安心だ。あとは後世の人々に託すとしよう。」

広村堤防

完成した堤防を見て、梧陵は静かにつぶやいた。

村人たちは、梧陵が多くの資金を投じ、寝食を忘れ、村人の救済や地域の復興に尽くしたことに深く感謝し、彼を「浜口大明神（はまぐちだいみょうじん）」としてまつり、神社を建立（こんりゅう）しようとした。その話を耳にした梧陵は、

「自分は神や仏になりたくない。そのようなことをしたら、今後村の人たちの世話をしない。」

と、きっぱりと拒否した。

堤防の完成から八十八年後の昭和二十一年（一九四六年）、再び南海大地震による高さ四メートルの津波が広村を襲ったが、梧陵と村人たちが完成させた堤防によって、村の大部分は浸水の被害を受けることがなかった。

堤防のある広川町では、今でも地域の人々や小中学生たちが、毎年のように梧陵が完成させた堤防の手入れを続けている。

※注１　稲むら・・・ここでは、脱穀したあとの稲わらを積み上げたものをさす。

※注２　銚子・・・現在の千葉県銚子市。ここに、梧陵の家業である醤油づくりの店があった。

（参考文献）
・『浜口梧陵伝』杉村楚人冠（すぎむらそじんかん）
・『浜口梧陵小伝』杉村楚人冠
・『稲むら燃ゆ　海嘯（かいしょう）と闘った男・浜口梧陵の軌跡』広川町
・『和歌山県教育史研究一』和歌山県教育史編纂委員会

（写真提供）
・養源寺
・広川町教育委員会

ノーブリス・オブリージュ（noblesse oblige）

「ノーブリス・オブリージュ」とは、欧米社会における基本的な道徳観です。「富んだ者は、社会のために自己の利益を犠牲にしなければならない。」「身分の高い者は、それに応じて果たさなければならない社会的責任と義務がある。」等の意味があり、財産、権力、社会的地位のある人々は、これを保持するために責任が伴うという考え方です。日本語では、「位高ければ徳高きを要す。」等と訳されます。

例えば、浜口梧陵の場合、広村を襲った大津波に対し、実業家として村人の救済等に尽力し、さらに、巨額の私財を投じて堤防建設等の復興に取り組みました。まさに、「ノーブリス・オブリージュ」を実行したといえるのではないでしょうか。